



TITLE:

菱山忍先生の御逝去を哭す

AUTHOR(S):

山口, 巖

CITATION:

山口, 巖. 菱山忍先生の御逝去を哭す. ことばの構造とことばの論理 : 山口巖教授停年記念論文集 1998: 777-781

ISSUE DATE:

1998-07

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/65772>

RIGHT:

うな、ということが、ある危機感をもって語られ、自治会の委員達は必死になってクラス討議を組織した。結果は予想をはるかに超える四千五百の賛成をもって、同学会の再建がみとめられることになる。

宇治分校でも、同学会の選挙のためのポスターがあちこちに貼りめぐらされた。選挙は参議院選挙に倣って全学区と学部区の本建てであったが、自治会の委員の大部分がそのどちらかに立候補することになった。

このポスターのいくつかには、公然と「日本共産党公認」の文字の入ったものがあつた。結成されたばかりの宇治分校自治会からも委員だったT君、I君、M君が、公認候補として立候補した。朝鮮戦争の終結の年であり、未だレッド・パージの記憶も生々しい当時、「共産党公認」の文字は、我々新生に大学の自由な雰囲気を実感させる、或種の鮮烈な印象を与えたように記憶している。しかも新聞で読むだけではない、党員の実物がそこらを歩きまわっていたのであるから。

.....

こう書きながら当時を思い出してみると、たとえば自治会のアクチヴなメンバーで、仏教の信者であつたS君のように、思想的には色々な立場があつたが、互の立場を尊重するという、リベラルな気風は未だ濃厚であつた。これは一つには当時は未だスターリンが健在であつて、社会主義に対する深刻な疑問が未だ存在しなかつた事によるものであつたろう。思えば幸福な時代であつた。

山口 巖 昭和二十八年入学・京都大学教養部助教授

『古代ロシア研究』 第15号 (泉井久之助・菱山忍両先生追悼号) 1983年9月15日。

菱山忍先生の御逝去を哭す

昭和56年4月22日、本会の創立に力を盡された菱山忍先生が逝去された。ここに謹んで先生の御冥福を祈る次第である。

先生は大正10年3月3日生れ、東京八王子市の御出身であった。享年60才である。

先生は昭和14年大阪外国語学校露語科に入学され、同16年12月に同校を御卒業になった。卒業に先立つ昭和16年8月に、先生は関東軍通訳として当時の満州国新京市に勤務されたが、翌17年1月には兵役に服され、陸軍中尉として終戦を迎えられた。

復員の後先生は昭和21年4月、京都大学文学部に御入学になり、言語学を専攻された。泉井久之助先生に師事されたのはこの時である。

昭和24年御卒業の後、先生は直ちに同大学院文学研究科に進学されたが、昭和26年12月に退学された。この間昭和25年2月から昭和27年3月までの約2年間、同志社大学図書館の司書をつとめられたようであるが、翌27年4月には天理大学に講師として着任され、昭和34年7月には、助教授に昇任された。

その後、昭和42年3月に天理大学を退職、同年4月に京都産業大学外国語学部教授として迎えられた。亡くなる直前には外国語学部長の要職にあった。

先生は比較的寡作であったが、その学風は実証的かつ極めて綿密なものであって、本邦における科学的なスラヴ学の基礎を築いた一人であった、ということができよう。

たとえば「スラヴ語族の形成について」(天理大学学報第9輯、昭和27年)において先生は「印欧諸語の原初的な分化にあたって特に至大な影響を与えたもの」としての「基層」に着目され、スラヴ諸族の形成をこの基層との関連において考察、スラヴ民族の人種的複合性とスラヴ語の特異性という、本邦のスラヴ研究にとっては新しい視点を提供された。

また「スラヴ字母組織の起源に関する考察(1)」(天理大学学報第12輯、昭和29年)は、キリール説、グラゴール説の論争の跡を要約整理し、これに基いて先生の見解を示される御心算であったと思われるが、惜しむらくは、未完のままに終わっている。

これらの論文、およびこれをめぐる種々の御研究の上に、「ロシア語史概説」

I-III (I - 古代ロシア研究第4号、昭和39年、II - 同第5号、昭和39年、III - 同第8号、昭和42年)が執筆された。

I は第一部第一章「共通スラヴ種族」(I. 文献資料、II. 考古学資料、III. ラウジッツ文化)、第二章「スラヴの故地」、第三章「スラヴ語派とバルト語派の関係」、第四章「古スラヴ語」、第五章「文字と発音」という構成である。II は第二部第一章「共通スラヴ語」(I. 音韻組織、(1) 音韻概観、(2) 開音節法則、(3) 音節同化法則、(4) アクセント、(5) 母音交替、(6) 弱化母音 *ŷ*、*i*、(7) 語頭の母音、(8) 共通スラヴ期後期、第一期、第二期)となっている。III は形態論であって、ここには第一章「名詞」(I. 名詞語幹、II. 曲用)、第二章「代名詞」、第三章「形容詞」(I. 構成、II. 変化、III. 比較級、IV. 最上級)、第四章「数詞」(I. 個数詞、II. 序数詞、III. 集合数詞、IV. 分数詞、V. 不変数詞)が収められている。

章立てに若干不揃いはあるものの、これらを概観するだけで既に明らかなように、これは本邦初の本格的、全面的な比較・歴史文法である。その行論の詳細綿密さにおいて、本邦においては、これに比肩しうるものは、未だ曾って存在していない。先生の生前の雄大な構想にもかかわらず、これが共通スラヴ語の粹にとどまり、しかも遂に動詞類に触れることなく終ったのは、惜しみて余りあることと言わねばならない。

一方「ロシア文・文型についての若干の考察」(天理大学学報第49輯、昭和41年)は、新聞の歴史記事、経済記事、教育記事の外、文学作品としてプーシキン「大尉の娘」、ゴーゴリの「外套」、ドストエフスキイの「虐げられし人々」、ツルゲーネフの「煙」、トルストイの「復活」、チャーホフの短篇から「大さわざ」、中篇から「エヌさんの物語」、長篇から「ステップ」、ゴーリキイの「ある秋の一日」、ショーロホフの「静かなるドン」、エレンブルグの「第9堡壘」を資料として、ロシア語文型、文の要素について詳細な統計をとり、ジャンル別、作家別にその使用の特徴を明らかにしようとしたものである。先生はこれに「文章形態学」なる名称を与えられたが、これはその形式性と統計的手法によって、方法的に極めて斬新なものであり、近年の統計的数理言語学の研究の魁をなすというばかりでなく、内容的にも決して遜色のないものである。またその資料の選択について

みても、ジャンル、作品の長短ばかりでなく、時代的な面にも行届いた注意が払われていることが判る。先生の学問的な水準の高さと洞察の鋭さを窺わせるに充分な好論文ということができよう。

この外先生は「(訳・注)聖キリール伝」(I - 京都産業大学紀要第一輯、昭和44年、II - 京都産業大学論集第3号、昭和47年、III - 同第2巻第3号、昭和48(1973)年)において、細心綿密な訳注の作業を行われた。これは先生がかねてより理想とされていた文献学的研究の一つの実践であったと思われる。

先生の人となりは誠実で飾り気がなく、後輩ばかりでなく学生に対しても常に対等に接し、親身になって世話をやいておられた。人によって態度を変えるなどということは、到底先生の能くするところではなかった。その若々しい風貌と相俟って学生の人氣が絶大であったのも、思えば当然であった。特に女子学生の人氣が高かったと聞及んでいる。

また恩師を敬愛する心があって、みずから死の床にありながら泉井先生のことを案じて、何くれとなく指示をしておられたということである。先生こそは、幼児のようにまれにみる純な心をもった方であった。

いつぞや産業大学で先生にお目にかかった折、向いの泉井先生の研究室を指さされて、「君、あそこに電気がともっていると、僕は抜き足差し足で自分の研究室に入るんだ。先生に菱山君最近勉強しているかい、と聞かれたらどうしようと思うからね。君もそう思うだろう?」といわれたことがある。私はすでに初老であった先生が、廊下を抜き足差し足で歩かれる姿を想像して思わず吹き出してしまったが、先生の恩師に対する愛情が思われて、今もあざやかな印象となっている。とにかく先生はそういう人であった。

亡くなる半年程前、京都の堀川会館で泉井先生が世話人となって行われた、印欧語学専門会議の後のレセプションで、先生はにこにこしながらビールを飲んでおられたが、私にそっと手がひどく痛んで困っているといわれた。これは先生の体を蝕んでいた病魔のためであったが、私は当時はそんなことは露にも思わず、お大切にといってお別れたまま、それが先生の御元気な姿を拝する最後の機会と

なってしまった。あとで聞けば先生はその頃すでに激痛にみまわれ、大層不機嫌であられた由である。きっと泉井先生のおめでたい席であるということで、病をおして出席され、努めてにこやかにしておられたのであろう。誠に情に篤い方であった。

想い出はつきないが、先生の御人柄の一端を誌し、謹んで先生の御冥福を祈る次第である。

「らいふすてーじ」臨時増刊(新入生歓迎号) 1984年3月15日。

大 学 生 を 語 る

大学時代が一生を規定する

新入生は最初から、それなりに目指すものがあって、大学に入ってきているだろうと思うんですね。ここその学部でこれをしたいというところまで明確であるかどうかは別としてね、何かやろうとして入ってきてるには違いないんですね。ただ、やみくもにそればかりしていたのでは将来伸びるとは思われない。いろんなことを経験する、ことに友人との話とかが充分になされないといけないと思いますし、そういった大きな文脈というのかな、そういうものが必要だと思うんですね。

僕の大学時代の友人たちにしろ、その後の生き方みても、やっぱり大学で考えていたことの延長線上に彼らはあるという感じがしますね、そこからあまりはなれていないです。具体的なことは違うわけけれども、何か、大学時代が一生を規定してしまったみたいなどころがありますね。

自分で自分を規定してしまっはいけない

僕自身も、一年工学部に行って、やはりだめだというんで文学部に転部したの